

耕作放棄地でイモとそばを栽培し、収穫する長陽小の児童＝南阿蘇村



ふーど力

教育ファーム

食育の一環で、子どもたちの農業体験が盛んになっている。九州農政局の調査では、小学校の約8割、中学校の約4割が何らかの活動をしているという。農林水産省は、農家の指導で年間を通じて作物を栽培して、より高い教育効果が期待できる「教育ファーム」の普及を図る。県内では耕作放棄地の再生（2010年度は20地区、約201㌥）と組み合わせて取り組んでいる。

（峰松清子）

「ただの荒地地と思っていたの、ちゃんとイモが大きくなったからすごい」。南阿蘇村立長陽小6年の松山望さんと飛瀬彩乃さんは、自分たちで掘った

イモを手を顔を見合わせ、自然の力の大きさに目を丸くした。イモは家族に協力してもらい、焼きイモや大学イモにするという。

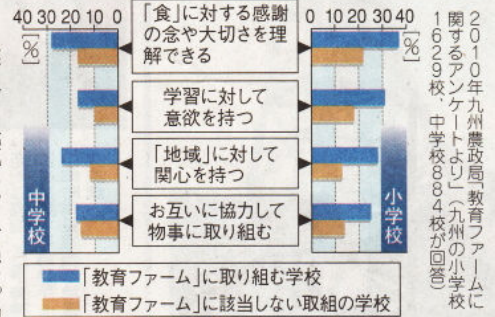
11月中旬、同小の児童85人が、県道沿いの耕作放棄地約19㌥で栽培したイモとソバを収穫した。同村農業委員会が、県の「子どもたちによる耕作放棄地再生モデル事業」の助成金35万円を利用して、今年初めて企画した。

隣接の農地を所有する川崎薫さん（65）ら同委員会メンバーが指導を担当。川崎さんは「荒廃農地がよみがえり、住民は喜んでいいる。子どもたちの笑顔は農

食の大切さ実感 地域に元気 農業体験

農林漁業体験の効果

該当者が「かなり増えた」と回答した学校（複数回答）



業も町も元気にしますね」。地域にもたらす影響の大きさを実感した様子だ。

J A阿蘇青壮年部高森支部は高森町立高森中央小と連携し、

金丸弘美の地域リーダー

学校の授業で、農家と連携して田植えや稲刈りをしたり、修学旅行で農業体験を取り入れたらいいということが国内外で盛んになっている。食と農の現場を子どもたちに見せるためだ。

その背景には、子どもたちが生産の現場から遠いところにいるために、命の根幹である食を理解する機会が少ないことがある。また、実際に体験することで机上では学べない香りや味わい、生産地の風景や土、歴史、文化などを実感として学ぶことができる。

先般、地産地消の取り組みや環境に配慮した街づくりで知られるドイツのヴァ

机上では学べない命の根幹

ルトキルヒ市を訪ねる機会があった。「朝食を食べてこない子どもや、家族に食事をしていない子どもがいて。地域の食のことがわからなくなっている家庭も多い」と市長。市長自ら、料亭と市長、市長自ら、料理家と子どもたちを連れて畑に行き、野菜を収穫して料理を作り、その楽しさを伝える学習をしていた。

イタリアのトリノ近郊の小学校では、農業経験がある定年退職者を学校に招き、農業や化学肥料を使わない野菜作りを教えるという。収穫した農産物を年間約90万人の親子が参加するまでになっている。三重県の農業体験ファーム「モクモク手づくりファーム」は、先進地のフランスと交換留学も実施し、体験プログラムの充実を図っている。

（食環境ジャーナリスト）

児童の農業体験に取り組み4年目。耕作放棄地を利用して、1年生はイモとひまわり、2年生は季節野菜、3年生は在来種の「みさを大豆」など学年別に栽培作物を設定、6年間継続して農作業を体験する。

お年寄りに農機具の使い方をおもいに、大豆はJ A女性部の指導で豆腐や納豆に加工する。同小の河野有紀教諭は「地域のさまざまな人にかかわってもらって農業体験で、子どもたちは食の大切さを実感できている。大人になっても忘れることはないだろう」と話す。

さらに6年生は夏休みの2日間、青壮年部員宅で「職場体験」をする。部長の三森伸治さん（38）は「朝から夕方まで仕事

で、子どもたちからはきついと評判です」と苦笑い。「でも達成感を得て、生き生きとしてますよ」

この事業で再生した農地は2畝。高森の耕作放棄地は247畝。このうち再生可能なのは約14畝しかない」と三森さん。耕作放棄地が同町の耕作面積の1割を占める現実にショックを受け、子どもたちの食育と併せて企画したという。「私たち農家も子どもたちと一緒に学んでいこう。地域の理解を得ながら長く続けていきたい」と意気込む。

11月1日掲載

